今、いちばん気になる統計は?

中国小売売上高

2014年半ばからの1年間で2.5倍の急騰をみせた上海総合株価指数は、6月上旬にピークをつけてからの1ヶ月間で30%以上もの急落を演じた。当局の強硬な株価対策もあって、一方的な値下がりは回避できたものの、中国景気に対する不透明感などを背景に、底這い状態が続いている。

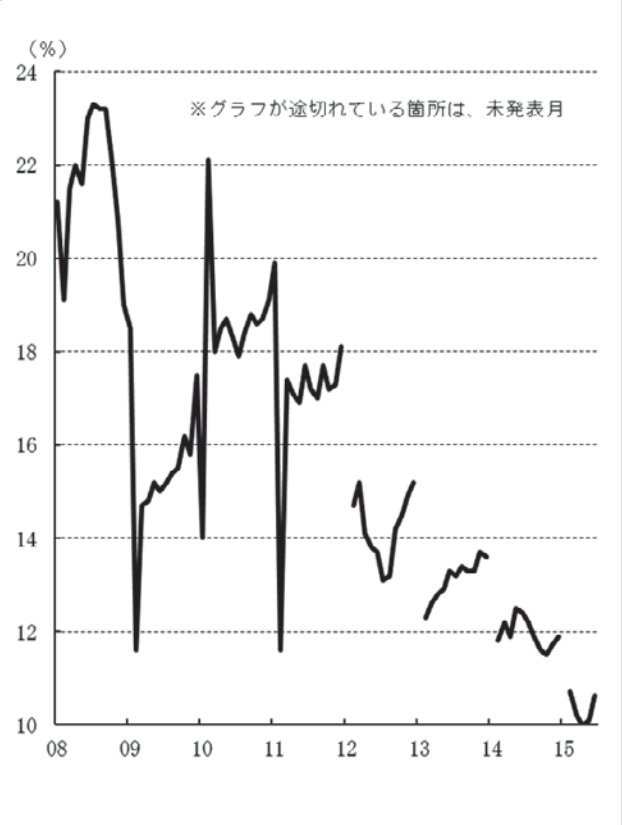
この間に失われた株の時価総額は500兆円近くに達したとされている。株価下落に歯止めがかかったとしても、失われた富から生じる経済への悪影響(逆資産効果)が気になるところだ。

世界経済を俯瞰すると、欧米景気の明るさが強まる一方で、中国をはじめとしたアジア景気の停滞が際立つ。中国株急落により個人消費が失速すると、欧米を牽引車とした世界同時景気回復の芽が摘まれるリスクが高まる。

"株価急落後"となる7～9月期の中国の個人消費統計となる小売売上高が下ぶれるようであれば、年後半の世界経済にも影をさすこととなろう。

(経済調査部　嶌峰　義清)

資料　中国小売売上高の推移(前年同月比)



(出所)中国国家統計局

編集後記

6月から7月にかけて世界の金融市場はギリシャと中国に振り回されたと言えよう。ギリシャについては最悪のシナリオであるユーロ離脱が一瞬とは言え現実味を帯びたことで、流石にそこまでは織り込んでいなかった市場は大きく反応せざるを得なかった。中国の株式市場は「やり過ぎでは?」と感じている人も多かったはずだが背後に政府の後押しを感じて流れに乗った投資家が右往左往して下げを加速させた面もあるようだ。いずれも梯子が外され一気に不安になったということだ。

どちらも問題が解決したわけではないので楽観はできないが今のところ小康状態である。今回の騒ぎで投資家はまた様々な論点を検討し、リスクを分析し、想定シナリオを見直しているはずだ。つまり織り込みつつある、或いは織り込んだということだ。

しかし、この「織り込み」という表現、市場参加者はよく使う便利な表現であるが、気をつけなきゃいけないのは織り込みのレベル感は投資家それぞれであるということ。分かった気になって「マーケットは織り込み済みなので問題なし」と緊張を解くと手痛いしっぺ返しもありそうだ。　(H.S)

○第一生命経済研レポートに関するご意見・ご要望は、keizai@dlri.dai-ichi-life.co.jpまでお寄せ下さい。
○本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。